
お姫様抱っこ

リング

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お姫様抱っこ

【Zマーク】

Z6230R

【作者名】

リング

【あらすじ】

バンギラスへの愛を書いてみた結果がこれだよーー。震災で殺伐としているので、ハートフル小説を置いてみたくなったのであげてみた。

シーンー！ 山奥の集落にて、何かテカくて重い物が地面に落ちた音。

「……無理つ……」

進化祝いのその日、ピンの父親との挨拶や酒宴を終え、空氣を読んだ父親がピュアとピンを一人きりにさせてくれた。雰囲気もよくなってきたところで、いつものあれを……と頼まれ、一も二もなくピュアは恋人をお姫様抱っこをしようとして……床とピンの間に手を挟ませながらギブアップした。

「無理つてなによ……今までピュア君、私を支えてくれたじやない？」

挟まれた腕が痛くて涙が出そうなのに、その言葉で僕はまた涙がでそうになる。

「そんな事言つたつて……僕の1・5倍も重くなると、ともじやないが無茶じやないか……昨日までは出来たのに……」

ピンの顔が近い。今まで口が何処にあるかも見えないような彼女の顔は見事に鋭い牙が見え隠れする、トラバサミのようにワイルドで魅力的な口に。さなぎの中で閉じこもつていた四肢も生えて、体つきもすっかり女性らしい下半身に重きを置いた体型に。

ああ、地面を抉り取る鋭い爪も、大木をなぎ倒すたくましい尻尾も、岩を噛み碎く牙も、不意打ちしてきた敵を刺し潰す背中の棘も美しすぎる。あのたくましさならば子供が土砂崩れに見舞われてもピンが守ってくれるだろ？ 青々とした草にまぎれる黄緑とブルーのカラーリングも綺麗だ。

進化の朗報を聞いて飛び上がつて喜んだ今日、今はそんな風に見とれている場合じやないのに僕の脳は現実逃避をしたがつている。

「はあ……恐れていたことが……」

流線形の額に岩塊のよつた手を当てて、ピンは落ち込む。恋人補正を含む必要があるが、不覚にもこの可愛らしい動作にピコアは萌えてしまった。ヨーギラス時代以来、再度の一足歩行になれたお陰でこんな動作も可能になったのはとても嬉しいことなのだが、いかんせんその副作用で今のピンは……重い。

「ホントに……」「めん」「

申し訳なさそうに言ったピコアは肩を落とし、冷氣交じりのため息を吐く。今日はめでたい日だと誓つのに、お祝いも佳境に入ったところに ここの氣まずい雰囲気。いやはや、どうすればいいのやら？

しかし、自身（の体重）が原因で肩を落とす男の子を見ていれば、女の子は誰だつて申し訳ない気持ちになるもので。

「「めん、私のほつこや……無茶言つて」「めんね。今度ダイエットでもするわ」

それでも、まだピンはお姫様抱っこをしてもらひつもつらじこ。ちょっと待つてよ、僕の立場は？

「いや、無理しなくてもいいよ……」

苦笑を浮かべる僕が無理をしないで欲しい対象はピンではない。むしろ自分が苦労をしたくない。サンギラスの彼女を持ち上げるだけでもいつぱいいつぱいなんだ、彼女がダイエットなんぞ始めてしまえば、僕もそれに応えるべく過酷なトレーニングに身をやつす必要が出てくる。

今まで十分美しいのだから、ダイエットなどしないで欲しいと切実に思つていた。しかし、彼女の次の言葉が何となく予想出来てしまつ。

「ううん」

ピンは首を振つて笑つた。その笑顔の美しさ、花が咲くことを『咲う（わらう）』と記述する理由を納得させるに相応しい、百花繚

乱に勝るとも劣らない華やかさである。無論のこと恋人補正も含まれているのだろうが、恋は盲田なので触れてはいけないのだ。

「ピュア君のためだから」

目的とこうの大義名分を相手に押し付けて、ピンは誘惑の上目遣いという手段。願わくば、断らせてほしいのだけれど……

進化する前はあどけなさの残る相対的に大きな眼と、普段は隠れて見えないくらい小さな口をしていた。だが、成長した今は口の形も目付きもすっかりと大人になつて落ち着いた雰囲気がある。その上、岩で出来た顔には進化した手特有の歪み一つない整つた顔立ちだ。

そんな美しい顔にはめ込まれた潤んだ目でこの必殺技（上目遣い）。土くれや砂嵐から目を保護するための瞬膜^{*} 1も取り払うことでの警戒をアピールして、最大限の眼力を發揮されれば、男なら誰しも心臓がドッキューんとなりすにはいられない。

僕達男にはその言ひ武器が少なくて、ちょっと不公平……ではあるまいか？

「だつて、ピュア君私をお姫様抱っこするの好きでしちう？」

美人で性格も良く、それでいて頭が極端に悪いというわけでは無い。

女性として理想形に近いピンであつたが、いかんせんあとボケたところがある。

確かに、僕はお姫様抱っこをするのが好きだけれど。

第一の理由に、自分の腕の中で仰向けになつて笑うピンの姿を誰よりも近くで見られる。

第二の理由に、仰向けというのは四足のポケモンにとつて無防備な体勢。今は一足歩行になつたが、バンギラスは肩についた棘や体重の重さ故に仰向けが無防備である事に変わりは無い。自分の前でならば無防備になつてもよいという彼女の自分へ対する想いは、ピュアにとつてそれだけで宝物だ。

進化したんだから……寝具の上でも無防備になつてくれるだらうか？ などという煩惱も最近では増してきている。

第三の理由に、昔から物語の主人公たる王子様に憧れていた僕にとつては、レックウザに捕らわれたミミロップを助け、ミミロップを抱いて風の如く走るルカリオに対して、大層憧れを抱いていた思い出がある。

だから、ピュアはお姫様抱っこをすることを嫌いなわけがなく、暇さえあればやつてやりたいくらいだ。しかし、今のピンは大層重い。ピンがサンガラスの頃は軽々と持ち上げられても、バンガラスに進化したピンをお姫様抱っこするのは、彼の言葉を借りるならば……無理つ！

「だから、私がんばつて痩せる」

でも、彼女が痩せるのを断るのはもつと無理つ……

「俺も体鍛えるよ」

そして……『無理つ……』なのに、ピュアはお姫様抱っこをする事を実質誓つてしまつ。男つて馬鹿だな ピュアは他人事のように心中で呟いて、現実逃避を始める。

「やつたあ！！ 一人で頑張ろうね」

抱きつかれた。もちろん嬉しいので振りほどきたくないし、そもそも相手が怪力すぎでとても振りほどけない。

「ふふ、今までずつとこつやつてピュア君を抱きしめてみたかったんだあ」

進化するまでピンが抱きつぶことなんて出来なかつたから、幼少時代を卒業して以後のピュアが、母親を除いた異性に抱かれるのはこれが初めてである。熱を持たない草と氷で構成された体へ急速に熱が生じ、考えてはいけないエッチな考えばかりが浮かんできた。

ともかく、その邪淫的な煩惱を少しでも追い出すために、ため息交じりのピュアは考えた。

さて、どうやって体鍛えようかな？

体を鍛えるつたつて、一朝一夕で身につくものではない。それにあまり急速にやり過ぎて体を壊してしまっては、元も子もない。やはり、地道な肉体労働が一番現実的な手段であるように思える。のだが、その肉体労働に重い物を持ち上げる機会があるかと言えば結構微妙な所である。

頭上に実るは枝に生えたばかりの未熟な青く小さい果実。甘酸っぱい果汁を滴らせる赤い果実となるには程遠い。運動と言えば、せいぜい脚立を持つてそれに上り未熟な果実をねじ切る摘果* 2くらいいの動作しかない。むしろ上り下りに四苦八苦する脚力の方が付いてしまうのではないか？

もちろん、彼女を支えるには脚力を鍛える必要もあるのだろうけれど……このままで僕の1・5倍近い体重の彼女を支えるなんて……僕の腕力では無理っつ！！

少しでも、筋力が上がるようになると、僕は張り切つて仕事をしてみたけれど、これはキツイ。なんというかあれば、休み時間が本当に恋しくなるようになつた。

ピンの父親にしてこの果樹園の持ち主もその変化を感じ取つているようである。

「俺の娘が進化してから、ピュア君てば仕事に精を出すようになつたなあ……そりや、嬉しいことだけれどなあ。あんまり頑張り過ぎると体に毒だぜ？ 適度に休みなさんな……お前に体を壊されて困るのはお前さんだけじゃねえんだ」

だから、こんな事を言われてしまう。今のピンは、父親のボスゴドラ チヤガと二人暮らしで、このまま関係を進めていけば僕が婿養子になるのだろう。チヤガの言う困るという事は『家族だから困る』と『仕事が遅れるから困る』の両方の意味が込められている

分、最近体にガタがきている僕は耳が痛い。でも、反対に心は暖かくつて、実家とは大違った。

僕が大根栽培をやっていた実家では、兄弟の中では一番の末っ子の僕が労働力として宛てにされる事も特に無く、収穫や植え付けなどの最盛期のおまけみたいな扱いでしか必要とされていなかつたといつのに。

収穫祭で一緒に踊つて知り合つたこの家の主人に人手不足だと誘われ、このリンゴ園に来てみたら今までの生活が嘘のように必要とされてしまった。とりわけ、サナギラスの状態では日常生活が不便な一人娘のピンに必要とされているのが嬉しかつた。街へ下りた時のためにお金稼ぐだけのつもりでチャガさんに世話になつたが、今となつてはもう泊まり込みもザラで、家にいる時間よりもこっちにいる時間の方が長い始末だ。

それで、今現在だ。問題のお姫様だつこは、ガスを噴射してしか移動できないサナギラスからバンギラスに進化した今となつては、ピンには必要のないものだ。そして、必要ないとわかつていても、互いになんとなく求め合つてしまふものなのだ。必要とされるのが嬉しい僕と、尽くしてもらえるのが嬉しいピン。うん、我ながらお似合いだと思う。

だからそう、

「体を壊したくないのは山々なんですけれどね……なんというか、腕を鍛えたくつて」

なんて思つてしまふのだ。

「おいおい、果樹園は腕力で支えていくものじゃないぜ？ リンゴへの愛が支えていくんだよなあ……これが」

言いながら、木の幹に頬ずり。ボスゴドラは見た目によらず木や庭の世話をしたりするのが好きと聞くが、本当にこの土地を誇りに思つてゐる事が伝わつてくる。

「あはは……木と間違えて間違えて僕に頬ずりなんてしないでくだ

さいよ？」

「しないしない。触れたとたんに冷た過ぎてすぐに分からあ！！あ、もしかしたら冷た過ぎて頬擦りした瞬間にくつついちまつて離れたくつても離れられないなんてのもあるかもなあ。

その時は俺と結婚するかい？」

チャガは縁起でもない事を言ってガツハツハと豪快に笑う。その時は

「あはは、その時は結婚しましようか？ 男と結婚とかそんなの嫌ですかから、そうならないように気をつけます」

その時は とう言葉がなんだか嬉しい。『その時』ではない時は、ピンと結婚しようと言われているようだし、『くつつく』という言葉にも僕の邪な（ある意味ピュアな）考えを蜂起させるに事足りる。願わくば結婚してピンとあつち系の意味でくつつきたいなんて、男として当然の感情だけれど……まだ結婚もしていないから考えちゃダメ。

でも、転機というのは唐突だ。

「いや、気をつけるよりも、もつと確実な手段があるぞ？ 先手をうつて俺と結婚できなくすればいいんだ」

まあ、ここまで僕はチャガの言いたい事を半分以上理解した。「先手を打つって……先に結婚しておけってことですか？」

「おう、察しがいい。お前は働き者だし、娘もお気に入りだ。まだ、娘には話していないけれど、ハレの舞台への豪華な食事に綺麗な服を買う為の蓄えはあるんだ。後は、相手と娘さえよければってこと。この進化を期にな……出来るならば早めに済ませてしまいたいんだ」「若いうちに……ですか」

ピンの母親キキはピンを産み落とした後、ピンが孵化する前に死んでしまった。原因は、高齢出産による衰弱。チャガとキキは年の差のある結婚だった。

「ああ。子供産んで死んじまうのだけは何としてでも避けてほしい

からなあ……

若いうちに済ませといて欲しいんだわ。うん、でもま

あ、お前らはまだまだ若い。再来年だろうが十年後だろうが、力力

アのおっちゃんた年齢には及ばんわなあ。でも、不安なんだわ

「ピンと結婚ですか……考えるまでもないんだけれど。僕にとつてはするか否かではなく、いつするかつて問題だなあ……」

どうしよう。恥ずかしい。

「んまあ、ホント急ぐなよ？ 何も、進化だけが切つ掛けつてわけじゃねえさ。ピンにも同じ事言つて来るからよお、その時は……まあ、その時もピンとお前次第だわなあ。

とりあえず言いたいことはだな……その、お前はいつでも俺の家にいてもいってこつた。な、ピュア？ 思い立つたが吉田とも言うからよ……天国のキキの奴にも早いとこ嫁入り見せてやりたいんだ」

妻の顔を懐かしむようにチャガははにかむ。本当に、この家族は僕の求めているものを持っていてくれる。僕を必要としてくれる事がこんなにも嬉しいなんて知らなかつた。

「そんなこと言われると……本当に体壊せなくなっちゃいますね」

「おう、体は大事よ。特に腰には気をつけろよな？ 女を端がせるに腰が砕けちまつたら、夫婦の夜はなりたたねえわなあ」

あまり女性のいるところでは話せない、下品な会話を挟みつつ会話が弾んでいる後ろで、ドシンツという可愛らしい（怪獣グループの考えは理解できないとよく言われます）足音が響いて、二人は振り向いた。

「仲いいわね、二人とも。お昼(1)はんの採掘出来たから、会話も切り上げちゃつてご飯にしちゃおつよ」

「おう、お前の鉄鉱石はいつも美味しいんだよな」

正直、同じ場所で採掘される鉄鉱石の何がどう違うのかは分からなければ、気にしたら負けかな。

「ちょっと、父さん。私は料理だつてうまいんだから。鉱石の採掘の腕だけじゃないのよ？」

「そうそう、僕もピンの料理好きだよ」

結婚すれば、こんなやり取りが途切れることなく続くようになる。それはとっても魅力的なことだ。

*

時は過ぎて収穫期。冬も近い。僕はユキノオーという種族がらむしろ元気になるくらいだけれど、やっぱりピンやチャガには辛いみたい。あれから腕力は少し上がったのだけれど、やっぱりまだまだピンは持ち上がるそぶりすら見せない。ピンもまた、冬を迎えるという今痩せているのは自殺行為に他ならないから、と……太つて精をつけなきゃいけないわけで、程良く脂肪をため込んだ彼女は痩せた時よりも遙かに魅力的だ。

あの一撃で大木をなぎ倒してしまいそうな太い尻尾もドンメルの「ア」のように栄養を抱え込んでいるのかさらにたくましくなった。あれ、もしかして僕にお姫様抱っこさせる気ないんじゃない？

と、ともかく……収穫が終わったら結婚しようとも思つたけれど、どうしよう？

今の一番魅力的な彼女をハレの舞台に立たせるといつのならば申し分ない。けれど、恥ずかしい……僕は名前の通り無垢なんだから、ここはピンが切りだしてくれると嬉しいなあ。

なんて、弱気ではいけないのだろうけれど。この季節は、街まで果実を売りに行くので筋力が上がる……と良いな。しかし、筋力を上げるべきだと言つのに、彼女の方がよっぽど大きい荷物を持つている気がするのは気にしちゃいけない見ちゃいけない。どーせ、生まれついての種族差は埋められませんよ。

とにかく、こんな惰性を続けてはいけない。切っ掛けだ、切っ掛けを掴まなくつては。きっかけさえあれば、僕たちはいつでもくつつく事が出来るはず。でも、切っ掛けなんて空から降つてくるわけでもないのだから、自分で見つけるしかないんだよなあ。

ホント、切っ掛けが何処かに落ちていないだろうか。

そう思いながら、収穫四日目の深夜。切っ掛けは落ちてた　と
いうか、切っ掛けが飛び降りた。『なんとか、収穫していないはずのリンゴの木から木の実がなくなつているような気がする』とチャガさんが言う。他の畑でも農作物が奪い取られる被害は多数に上つているから念のため　と、見張りに来てみたら案の定。

「お前が、このドロボー！！」

叫んでみた。とりあえず叫んでみた。でもこれ、僕にどうじろと
？　いや、その……相手バシャーモだし。

ここは地面が固いから足跡が特に残らないみたいだけれど、他の現場に残された足跡や匂いからそうなんぢゃないか……とささやかれていた犯人はバシャーモ説……僕が見つてしまつのは運がいいのか悪いのか。

「俺をつかまえる気か？　ギロリッ」

ダメだ。睨む時でさえ擬音が幻聴として聞こえるほど怖い。なん
というか、この家の家族構成を把握して狙つたかのように酷いタイ
プ構成。バシャーモの蹴りなんて喰らつてしまえば、僕もピンもチ
ヤガさんも一撃だ。

そして、二人はまだしも僕にあいつへ有効なダメージを与えられ
る技なんてない。あるとすれば……絶対零度くらいか

顔や種族を知られた以上、もつこの家には来ないかもだけれど…
…ハッサムの一家のドロボー被害とい、ザングースのところとい
い、皆弱点の家族経営ばかりが狙われている。

こんなことなら、水タイプやエスパートタイプでも警備に雇う
金なんてないからどうせ無駄か。そんなことは地主でもない限り不
可能だ。

「まあ、なんにせよ。顔を見るなんてのは頂けねえなあ。ちょっと
ばかり、記憶すっ飛ばしてもらおうか？」

まあ、なんにせよ。捕まえる見逃すではなくてやられるかやらな
いかという問題になつてしまつた。見れば見るほど良い脚は赤々と
燃えていて如何にも熱そうだ。あんな脚で蹴られたら死ねる、僕、
殺される。

逃げようにも、僕の脚はきっとバシャーモなんかより遅い。後ず
さりしたつて無駄。徐々に追い詰められるだけで、むしろ後ろがみ
えていない分僕の方がはるかに不利に追い込まれるのは目に見えて
いる。

僕が勝つている事なんて体重と身長くらいしか。適当に後ずさつ
ていたら、木の周りに引き抜かれた雑草が積まれていて、その後ろ
には大事なリングの木。いよいよ追い詰められたわけだ。このまま
振り向いて逃げようとすれば、その瞬間に後頭部に蹴りが飛ぶ。そ
うなれば、勝率はほぼ0%。ならば、少しでも勝てる手段を考えろ
……そうだ。バシャーモなんて、サナギラスの頃のピンよりもずつ
と軽い。

一撃。一撃耐えたら組み伏せて脚掴んで持ち上げて、絶対零度し
てジャイアントスイング*3で叩きのめしてやる。絶対零度なら一
撃必殺だし、掴んでいれば絶対零度だつて当たる。

冷静になれ……相手をよく見る。目線は上へ固定しつつも視界の
端で脚を見るんだ。左脚が大きく前に出た、右脚が後ろ。つまり、
蹴りは十中八九右足から来る。

蹴りが来た。当たつた、痛い。けれど、右脚が来るのが分かつた
から防御も出来たし、僕の首は太いんだ。この程度で脳震盪を起こ
してやるほど柔じやない。

防御した左腕はしばらく使いものにならうにない。けれど、そ
れで構わない、バシャーモは見た目よりも軽い。だから片手でだけ
でも……

「うおおおおおおおーー！」

片手で逆さづりだーー！お姫様抱っこのために鍛えていた僕の腕力なら、軽いバシャーモくらい楽勝だ。手首をひねりながら掴みあげたから、炎を吐く口は上手い具合に反対方向を向いている。目の前がくらくらして足元がおぼつかないけれど、手のどちらがおどろえているわけじゃない。

あとは、ちからをこめてこおつのなかにじこめる……

*

そして気が付けば僕は、ピンの腕の中に抱かれて運ばれていた。体型の都合上、多くの人型のポケモンと違つて怪獣の僕たちは背中に手が回らないから背負うことはできず、どうやらピンに抱えられているようだ。瞼を開けると斜め上にピンの顔が見える。

「よかつた、気が付いた……」

命に別条のない傷だつたのか、ピンは僕が生きていたことには驚かない様子。しかし、自分自身の胸に乗つけられている左腕がすごく痛い。

「ドロボーが……僕、やっぱり負けちゃったのか

とにかく、真っ先にそれが気になつた。

「負けたわよ……喧嘩なら」

ピンは肯定していくのに何故か笑つた。何故？

「でも、勝負には勝つた。貴方の声が聞こえたから駆けつけてみれば……酷い凍傷のバシャーモが這つて逃げようとしていたから、これ幸いと父さんと私でストーンエッジでぶつ飛ばしちゃつた。今は家で応急処置済ませて、病院に連れて行くところ。

父さんはとりあえず犯人連れてお役所ね……

「そつか……」

自業自得とは言え、怪力に定評のある一人がタイプ一致で放つ岩タイプの攻撃を一回分喰らつた不憫なバシャーモの惨状を僕が想像して、僕は憐れむと同時にいい気味だとほくそ笑んだ。

ピンは僕の胴体のせいで”かろうじて”しか前が見えない視界に四苦八苦しながら、気分よさげに僕の顔の方に視線を下げる。

「かつこよかつたわよ」

「え、」

と、僕は顔を上げる。

「いや、実際には貴方の雄姿は見ていないわよ？　もちろん。でも、バシャーモに立ち向かつたなんて事実そのものがかつこいいのよ。ユキノオーのくせに、あんな不利な相手に向かつて行くなんて馬鹿みたい」

「馬鹿みたい……確かに否定できないね。けれど、リンクはこの家の大切な財源だし食料だし……僕達には必要だから」

この時ピンから漏れたのは、呆れと愛おしさの混じる溜め息
だつたのだろうか。

「リンクも大事だけれどピュア君の命ほどじゃないんだから……馬鹿」

『馬鹿みたい』から『馬鹿』に昇格されて、なんだか笑つてしまつた。まだ傷が痛くつて上手く笑えやしないけれど、すぐ安心したほのぼのとした空気。今なら、言える。

「馬鹿でもいいから、僕と結婚してくれないかな？」

今度は、ピンが笑つた。クスクス　から、どんどん盛大な笑い方になつてしまつので、すごく恥ずかしい。

「笑わないでよ」

「だつてえ、お姫様だつこをしてもらえたから結婚しようつて思つていたのに……」

「ごめん。それ半分あきらめてた。つていうか、軽石か何かでも使

わないと無理だと思つ。

「自分がピュア君をお姫様だつこをした時に告白されたなんて……
ちょっと意外だつたから」

そう言えば、今の恰好は正しくお姫様だつこ。氣づいてしまつと、
なんだか恥ずかしい。

「これじゃ、王子様だつこだね」

「うん、でもそれで良いと思う。私が求めてばかりじゃなく、たま
にはピュア君の求める事をしてあげたい。だから、ピュア君が求め
るもののが私と結ばれることならば……私も、結婚したい」
なんだか、当初の計画とは違つけれど……ま、いつか。

「ありがとう」

お姫様だつこは最後まで出来なかつたけれど、これからもよろし
く。

(後書き)

さて、お姫様抱っこはお楽しみいただけたでしょうか？

結構昔の作品ですが、R-18表現のないところまで上げておきます。

私の作品R-18多すぎですねみませんw　かいじゅうグループも可愛いと思います。みんなで愛でてあげてください。

- * 1 多くの脊椎動物の眼球の前面をおおって、角膜を保護する透明の薄い膜。無尾両生類や魚類の一部・鳥類・爬虫類では発達しているが、哺乳類では退化して痕跡をとどめるに過ぎない。
- * 2 よい果実を得たり、枝を保護するために、余分な果実をつみ取ること。
- * 3 仰向けの相手の両足首（または両膝）を脇の下に挟み込んでから抱え上げ、回転しながら相手を振り回し、平衡感覚を失わせることでダメージを与えるプロレス技

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6230r/>

お姫様抱っこ

2011年3月15日02時40分発行